

人生という道

人生は、よく道に例えられます。去る1月8日に行われた高松市成人式のテーマも「道～未来への歩み～」というものでした。二十歳になり人生の大きな節目を迎えられた成人一人一人にこれまでの歩んできた道があります。それを振り返りながら、親や友人や先生などお世話になった人たちに感謝をし、未来に向かって自分の道を切り開いていって欲しいと思います。

人生の道といえば、徳川家康の遺訓が有名です。曰く、「人の一生は重荷を負うて、遠き道に行くがごとし。急ぐべからず。・・・」これもまた真実でしょう。でも、人生の道は苦しいことばかりではありません。

歌人の俵万智さんに「『寒いね』と話しかければ『寒いね』と答える人のいるあたたかさ」という短歌があります。どんな寒さでも恋人や親友など、本当に親しい人同士で分かち合えば心のあたたかさになるといことです。人生の道を歩むのはそれぞれ孤である自分一人だけかもしれません。でも親や友人、恋人や伴侶、子どもなど言わば人生の先導者や伴走者の存在により、道は様々に彩られます。そして、他者の存在があつてこそ人生の道は先に伸び、人は歩を進めることができるのではないのでしょうか。

「人生の道」は「命」という言葉に置き換えても良いかもしれません。松尾芭蕉に次のような句があります。

命二つ 中に活きたる 桜かな

「(20年ぶりに)友人2人が命あつて再会することができた。その喜びの2人の中に桜がいきいきと咲いている。」というものです。友人2人の人生の道が再び交わった喜びが表されています。同時に命は、自分一人だけのものではない。自分の命も他人の命によって支えられているのだということです。

「道」というタイトルの宇多田ヒカルさんの歌が昨年ヒットしました。宇多田さんの人生の道においてその始まりから常に見守り、今も、そしてこれからも励ましてくれるであろう亡くなられたお母さんに捧げた歌だと言われています。そして、英語で繰り返されるサビの部分は「(人生は)孤独な道だけれど、一人じゃない。」という意味です。

新成人の皆さん、周りの人への感謝を忘れず、急がずしっかりと自らの道を歩んでいってください。